「帝国」の語りとしての「山月記」

篠崎美生子

一

中島敦「山月記」では、進士登第後に江南尉のポストに就いた李徴が「いくばくもなく官を退いた」のは、彼が「性、狷介、自ら恃む所頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた」ためだと語られている。だが、「天宝の末年」というテクストの時代背景を考慮した場合、この理由は十分納得できるものとは言えないだろう。まず、諸氏がつとに指摘するように、「唐朝の官僚」が「最初にあるいは二番目につく官職として、県の尉を経歴する事例[1]」は多く、江南尉は決して「賤吏」とは言えないからである。仮に李徴が、「自ら恃む所頗る厚」いがために、のちに登場する袁傪のような特別なエリートコースを望んだのだとしても[2]、官位にあることが本人と一族の繁栄を保証[3]することを考えるなら、辞職のリスクは大きすぎる。たしかに、原典「人虎伝[4]」の李徴が「倨傲」のゆえに江南尉の任期満了後に故郷に「退き帰」ったという物語上の先例はある。しかし、「皇族の子[5]」であり、官を辞しても「郡国の長吏」の歓待によって経済力を回復・維持することができる「人虎伝」の李徴と、「貧窮に耐へず」に再就職を迫られる「山月記」の李徴とでは事情が異なっている。

とすれば、「山月記」の李徴がこのような背水の陣を敷いた理由はやはり、「詩家としての名を死後百年に遺さうとした」点に求めるほかあるまい。だが、政治と芸術を二項対立的に位置づけ、前者よりも後者により高い意義を見出そうとする発想は、本来、盛唐にはなじまない。あとでも述べるように、当時は多分に政治と詩は一体化しており、科挙（中でも進士）では詩作の力が最重要視された[6]からである。もちろん、「山月記」は政治よりも芸術を重んじるモードを多分に擁する日本近代文学のひとつの成果であり、その方面から貴重な解釈が蓄積されてきたことはたしかである。しかし、中国における科挙制度とその価値を前景化して考えるならば、「進士」と「詩家」を天秤にかけて敢えて後者を選び取った李徴の生き方は、唐という中央集権国家において異様である[7]。

これが異様なのは、盛唐に限ったことではない。清末の一九〇五年に廃止された科挙に代わって「かつての「読書人」はみな、大学で学ぶようにな」[8]ったが、その学生たちは「役人、さらに政府高官になる可能性が大いにある」存在として人々から非常に尊敬されたそうだ。たとえば一九一九年に北京の学生たちによって五四運動が起きたときも、当初は「軍や警察は学生たちの前では萎縮してしまい」、「大統領でさえ」「五四運動に参加した学生たちを逮捕したところ、処分に困って、高官を派遣して、逮捕された学生たちにお詫びまでした」[9]という。つまり中国の人々にとって、千年以上の間、勉学に励むということは「科挙」に応じることであり、それはすなわち「人材を天子に献上する」[10]ことを意味していたのである。熊遠報が、そうした伝統的科挙登第者を（体制にとっての）「牧羊犬」[11]と称し、独立した個を以て五四運動に参じて北京政府を批判した書生たちと区別したのは、まことに意味深長である。

しかし、五四運動は結局、北京政府の弾圧を受けた上、ベルサイユ会議で山東半島の権益を死守しようとする日本では、暴力的で愚かな事件として報じられた。これは今日の書物にすら見られる傾向である。体制にとって都合の悪いもの、不穏なものが、どのように語られ、意味づけられていくのかを、五四運動言説はよく示していると言えるだろう。

「山月記」もまた、「帝国」の言説がますます時代を席巻していた一九四二年に発表された小説[12]である。中島敦が少年時代を「朝鮮」に暮らし、パラオの南洋庁で植民地用教科書作成の仕事に携わった経験を持つこと、また、朝鮮やパラオを舞台にしたテクストがあることから、「中島」を「植民地」をキーワードに読み解く仕事はすでに多い。それらの仕事にも倣いつつ、本論では、「山月記」を、体制（＝「帝国」）に逆らう者がどのように語られてしまうのかという文脈で読み解いてみたい。そしてそのような物語が、すでに七〇年以上にわたって「国語」の授業で扱われ続けている意味についても考察してみたいと思う。

二

前章で、盛唐においては政治と詩は一体化していたと述べたが、まずはこの点を確認するところから始めよう。村上哲見によれば、唐の科挙のうち最も重んじられたのが「進士科」で、「経書・韻文・散文を三本の柱」[13]とした試験であったという。「韻文」で、「詩賦各一首の出題が確定したのは、天宝十載（七五一）以降」[14]で、以後、これが最重視されるようになった。「作品を通じて進歩的な政治観・社会観を表現」[15]する力を見ようとしたためとも、「将来、高級官僚となって朝廷における様々な文章の作成に携わ」[16]る力を見ようとしたためとも言われるが、いずれにせよここにおいて政治と詩は一体のものであったのだ。そして、「洛陽を中心とする標準的な読書音」による「押韻規則」[17]を身につけた者だけが、そこに参入できたのである。

そのように考えると、李徴と同時期の実在人物で、自由詩人などと称される李白についても、そのイメージを改めておく必要が生じてくるだろう。「山月記」の数年前に世に出た上村忠治『放

浪詩人 李白』（春秋社、一九三八）は、李白を「デカダン文士肌の彼には家庭も要らず、繁文縟礼も要ら」ない詩人と紹介、玄宗に招かれての都での生活はさほど重視していない。李白を隴西出身とする説[18]も当時からあり、こうした李白像が、進士を捨てて詩を選ぶ李徴像に、小説発表当時からリアリティを与えた可能性は考えられる。しかし、今日の研究は、たとえば李白が胡人（外国人）であったため、または商人の子であったために科挙の受験資格を持たず、詩を通じて「自らの名声を高めることによって、朝廷から招聘される[19]」道を模索、「制挙[20]」に応じた可能性など示している。ここからは、体制の好む言語を身につけ、詩を武器としてその中枢にはいっていこうとする、野心みなぎる李白像が浮かび上がってくるのだ。

仮に李白像をこのようにとらえた場合、すでに進士に及第しながら、それをなげうって詩に価値を見出していく李徴は、李白とは全く異なるベクトルを持つ存在[21]となろう。

しかし、その李徴は、いったいなぜ虎になるのか、あるいは虎に変じるべき者として語られねばならないのだろうか。

「山月記」は高等学校「現代文B」の定番教材としても知られる小説である。すでに批判の対象ともなっているところだが、この教材にはかつて、李徴はなぜ虎になったのかという質問や、袁傪が李徴の詩に対して思う「欠ける所」は何かという質問が付きものであった。佐野幹は各社の教師用指導書を長期にわたって綿密に分析した結果を、以下のように端的にまとめている。

難解な文体を乗り越え、ヒントを小出しにされながら、苦心して読解を終えた学習者の先に待っているのは、「好き勝手やっていると悲惨な目に遭いますよ」というお説教なのである。つまり、「好き勝手」（「協調性に欠ける」「人間性の欠如」「切磋琢磨に努めない」等）やっていると、悲惨な目（虎になるという不条理）にあいますよ」という主題である。[22]

身も蓋もない言い方をすれば、どれほど「人間性」が欠如しようと人は虎になどなりはしない。しかも「山月記」李徴が自ら語る欠点とは、「尊大な羞恥心」、「臆病な自尊心」といった程度の、あるいは妻子の生活よりも先に「詩の伝録」を依頼してしまったという程度のありがちなことに過ぎず、「人虎伝」李徴の「一孀婦」と密通し、交際を妨げようとした「一家数人尽く焚殺して去[23]」った過去とは到底比べ物にならない。むしろ「山月記」の李徴が、突然我が身に起こった不条理な出来事に際し、原因を自らに求めて苦悶せざるを得ない様子はきわめて「人間」的[24]である。しかし、教室で「山月記」を読む高校生を含むこれまでの多くの読者がそれを見過ごし、李徴を責める読み方を選んできたのは、いったいなぜなのだろうか。

三

隴西の李徴は博学才頴、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃む所頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。

「山月記」は、三人称の語り手が李徴についての情報を語るところから始まる。この語り手は、李徴の性格、言動のほか「下吏

となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺さうとした」、「己の詩業に半ば絶望した」などと李徴の内面にも侵入し、代弁することで、その万能性を誇示する。そのためかこの三人称の語りは、教師用指導書でも「物語全体を俯瞰する視点」「客観的な視点」[25]などと呼ばれ、そこで提示される情報は信用されるべきものとして特権化されている。

この三人称の語りにさらに権威を与えているのは、おそらく袁傪の存在である。李徴の行方不明を述べた後、語りはすぐに「監察御史、陳群の袁傪といふ者」に言及する。観察御史が「検察を担当する御史台の官」[26]で、科挙合格者の中でも特別なエリートの一通過点であることは諸氏が指摘する通り[27]であり、「人虎伝」では、袁傪は後日「兵部侍郎」（従六品で防衛副大臣級）に昇ったと語られている。そもそもこの袁傪という人は実在の人物として『旧唐書』『新唐書』などにも登場しており、そこには反乱討伐に活躍したり、代宗のクーデター（七七七）後、捕らえられた元載一派の処分に当たったりした形跡が見える。小森陽一が「袁傪は、まさに、血で血を洗う権力闘争のただ中に、その身をおいている」として善悪の「単純な二項対立」[28]に疑義を呈しているのは、正鵠を射ていると言えよう。だが語り手は、この袁傪について、「勅命を奉じて」、「伴廻りの多勢」などとその権威を強調したうえで、「峻峭な李徴の性格」と対置させる形で「温和な袁傪」と紹介、彼に寄り添う姿勢を鮮明にするのである。

小説では、袁傪が虎に襲われかけたあと、三人称の語りはさりげなく虎の李徴の一人称語りに入れ替わる。しかし、すでに三人称の語りが李徴への内的焦点化を担保に、彼の性格の傲慢さから「発狂」のいきさつまでを語っていることにより、李徴の一人称には負のバイアスがかかることになる。しかも、体制（検察）の人間である袁傪が良質かつ正当な聴き手として設定されたことにより、李徴への読者の感情移入はますます妨げられるしかけになっているのである。

李徴の一人称が始まる場面を、やや長く引用してみよう。

袁傪は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久闊を叙した。そして、何故叢から出て来ないのかと問うた。李徴の声が答へて言ふ。自分は今や異類の身となつてゐる。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。且つ又、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起させるに決つてゐるからだ。しかし、今、図らずも故人に遭ふことを得て、愧赧の念をも忘れる程に懐かしい。どうか、ほんの暫くでいいから、我が醜悪な今の外形を厭はず、曽て君の友李徴であつた此の自分と話を交して呉れないだらうか。

後で考えれば不思議だったが、其の時、袁傪は、この超自然の怪異を、実に素直に受容れて、少しも怪まうとしなかつた。

注意しておきたいのは、せっかく始まった李徴の一人称が数行で遮られ、「素直」に虎の声に耳を傾ける袁傪を語る三人称に再び入れ替わっていることである。袁傪に「懐かしい」と呼びかけ、「曽て君の友李徴であつた此の自分と話を交して呉れないだらうか」と請う李徴の言葉に「狷介」な要素は見いだせず、もしこの

まま一人称の語りが続くならば、それを「少しも怪ま」ずに読み進められるばかりでなく、むしろ李徴は本当に「性、狷介」だったのだろうかと疑う手がかりも得られようが、三人称の語りの侵入はそれを妨げる。そして、虎の一人称を三人称が遮るスタイルは、まるで一定の距離を置いて打ちこまれる楔のように、この後も続いていくのである。

念のため、以下に該当箇所を引用する。

ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思つてゐるだらう！　己が人間だつた記憶のなくなることを。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上に成つた者でなければ。所で、さうだ。己がすつかり人間でなくなつて了ふ前に、一つ頼んで置き度いことがある。

袁傪はじめ一行は、息をのんで、叢中の声の語る不思議に聞入つてゐた。声は続けて言ふ。

他でもない。自分は元来詩人として名を成す積りでゐた。

（傍線：篠崎）

「山月記」の三人称の語りにおいては、李徴の語りは常に「声」と称される。前半の「草中の声」「叢中の声」が、詩の吟詠の時から「李徴の声」に変わるものの、李徴の語りが高潮を迎えるたび、これは単なる「声」に過ぎないと釘をさされることに変わりはない。

なお、佐野[29]も指摘した、李徴の詩に「欠ける所」があるという袁傪の感想も、この三人称の語りの中に置かれている。

しかし、袁傪は感嘆しながらも漠然と次の様に感じてゐた。成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑ひない。しかし、この儘では、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所があるのではないか、と。

（傍線：篠崎）

袁傪は明確な根拠を示していないが、重ねられる「しかし」が、李徴詩に対する袁傪の否定的評価を強く印象づけている。それは、李徴が伝録を依頼した詩が「山月記」にまったく引用されていないことにも反映していよう。つまり、それを聞き、書きとらせたはずの袁傪、そして袁傪の意を汲む三人称の語り手が、「長短凡そ三十篇」の李徴の詩をテクストから排除したのである。

唯一引用されている即興の七言律詩一篇についても、「人虎伝」の袁傪が「之を覧て驚いて曰く、君の才行我之を知れり」と語ったこととは異なり、「山月記」では袁傪の評価は語られない。「人々は最早、事の奇異を忘れ、粛然として、この詩人の薄倖を嘆じた」とあるものの、人々の関心事は李徴の詩よりも彼の「薄倖」――虎への変身の方に置かれている。つまり、袁傪の権威を巻き込んだこうした三人称の語りの構造こそが、「山月記」の李徴を「詩人に成りそこなつて虎になった哀れな男」にしてしまったのである。

四

先に、なぜ李徴は虎に変じるべき者として語られねばならなかったのかという問いを掲げてみたが、それはやはり、李徴が盛唐の進士にふさわしい志向を外れて、別の価値軸が存在すること

を身をもって標榜してしまったためだと言えるだろう。李徴ひとりの辞職など体制に何の影響も与えはしまいが、単に「神の国」という新たな価値を語っただけのイエスが「ユダヤ人の王」とあざけられて処刑されたように、異なる価値が見出されること自体が体制にとっては不穏と見なされがちである。とくに、本論冒頭に挙げた五四運動のように、異なる価値軸を一定の規模を持った人々が支持するとなれば、鎮圧の必要は一層高まる。実際の五四運動は、少なくとも初めは、知識人向けのメディアを舞台とした言論活動において、または平和的なデモ行進として展開されていたものだが、[30] 報道やその後の言説の中では、一九一九年五月四日当日、学生たちのうちの武力闘争派によって曹汝林（交通総長）、章宗祥（駐日公使）、陸宗輿（幣制局総裁）が襲撃された事件だけが強調された。

一例として、当時の『大阪毎日新聞』の記事をいくつか拾ってみよう。

①章宗祥氏死亡説　四日夜一時（一九一九・五・七、上海六日発）
北京伝来に依れば暴動学生団のため殴打され負傷せし章宗祥氏は四日夜一時遂に落命せりと。

②東京に於ける支那学生の不穏（一九一九・五・七、東京電話）
東京に於ける支那留学生の不穏は愈々高まり五日夜留学生は代表者を支那公使館に派し七日の国恥記念日大会に公使館の一部を提供せられたしと迫りしも峻拒されしが六日に至り不穏の色は益々留学生間に漲れり代表の一人は『私は温和派です』と冒頭して曰く『七日は支那の国恥記念日だ之は加藤前外相と陸宗輿との間に締結された日支協約（例の二十一箇条）に対する国民の悲憤を記念し（以下略：篠崎）』

③山東問題と漢口（一九一九・五・一〇、漢口特電七日発）
北京の騒動に関連し漢口でも種々の風説行はれ七日の国恥記念日を期し国民大会を開催すべしとの噂もありしが今日までの所何等の異状なし武昌にては各学校長及び警察に訓令し学生の行動を監視し居れり

④何処まで虫がよいのか　底の知れぬ支那学生総会　例に拠って日貨排斥も決議（一九二一・八・二四）
二十二日全国学生総会は評議会を開き広東代表の提出にかゝる華盛頓会議に支那から提出すべき問題案を討議したが其結果左の件を議決した。
一、二十一箇条を破棄する事
二、山東に於ける旧独逸所有の一切の権利を無条件で回収する事　（以下全九項目まで略：篠崎）

これらの記事からは、五四運動の担い手がまず「暴動学生団」（①）として名指されたうえ、実際には死亡していない章氏死亡説を語ることで、その「不穏」さが強調されていることがわかる。さらにその「不穏」さは東京の留学生の存在によって新聞読者の身近に迫っているかに感じさせられるのだが、一方で、『私は温和派です』（②）と自ら語る留学生への言及により、または、漢口の学生たちが監視の下に置かれてすでに「異常なし」（③）とされることで、「暴動」の「不穏」は語りの中で飼いならされてしまう。実際には学生たちを中心とした抗日運動、日貨排斥運動

は継続していくのだが、それらは「虫のいい」(④)こと、不正なこととして意味づけられてしまうのである。

これはまさに、盛唐が期待する進士の道以外に価値を見出してしまった李徴が、いったんは「人喰虎」として恐れられながらも、「温和な袁傪」の前にはまったく無力な存在として語られたことと符合する。自ら『私は温和派です』と語った留学生のように、虎は自分の「あさましい姿」を叢に隠し、唯一の希望として詩の伝録――留学生にとっては「国民の悲憤」が相当するだろう――を袁傪に依頼するのだが、その価値をも否定されてしまう。そしてとうとう彼は、三人称の語りの中で、変身の理由を自分自身の問題に求めて反省するような、いわば自ら飼いならされた虎にされてしまうのだ。

五

「山月記」は、袁傪一行が「丘の上」から「一匹の虎」を見下ろす位置関係を示して閉じられるが、東アジアにおける「虎」の表象を考慮すると、ここにも「帝国」における支配／被支配の構図を見出すことができそうだ。まず中国で、「中華民族の始祖の一人とされている伝説の神、「伏羲」は虎神」[31]とされているほか、現代中国語にも「虎」を含む語は多く、人々の思考と「虎」が分かちがたく結びついていることが類推される。また「虎」は、朝鮮半島の檀君神話で主要な役割を果たす存在でもあり、「朝鮮半島には、昔はあちこちの山にいた」「この国を象徴する動物だった」[32]という。中島敦「虎狩」[33](一九四二)も、一九二〇年代のソウル近郊に虎が生息していたことを示唆している。また、現代の韓国でも「虎」が人々のアイデンティティに関わっていることは、一九八八年のソウルオリンピックのマスコットが「虎」(ホドリ)であったことからもうかがい知れる。

しかし、このいわゆる「「朝鮮トラ」はほぼ絶滅」しており、「絶滅を加速した一つの理由として植民地支配者による「トラ狩り」遊戯が挙げられる」[34]との説がある。

「虎」という「朝鮮」のアイデンティティにも関わる生き物の滅亡に「帝国」の関与があったことは、遠藤公男『韓国の虎はなぜ消えたか』[35]に詳しい。聞き取りや記録の分析からなる本書が示すのは、一九〇〇～二〇年代の虎狩には娯楽によるもののほかに、害獣駆除として警察(総督府)が行う[36]ものと、土地の猟師などが生活のために行うものとがあり、誰が手を下したにせよ、虎の皮はしばしば「日本人」の手にわたっていたということである。一九一九年の三一独立運動が鎮圧されたのち、長谷川好道に代わって総督に就き、いわゆる「文治政治」を行った斉藤実もまた、「個人的に、大きな虎の皮を二枚手に入れた」のだという。

虎の減少には、他の要因もあったかもしれない。しかし、「日本人」による「虎」の抹殺＝民族抹殺という記憶が現代にまで継続した背景には、まさに斎藤時代の朝鮮総督府が作成した教科書『普通学校国語読本巻六』[37]所収の教材「第七　虎狩」の語り方も関連していると考えられる。以下に引用する。

或年京城で、日本赤十字社朝鮮本部の総会がひらかれました。総裁閑院宮殿下はこれにおのぞみになって、其のお帰り

に慶州を御らんになることになりました。
此の時の事です。九政里の駐在所に、「今朝大徳山で、私の子が虎のために大きずをうけました。」と申し出た者がありました。三宅巡査は其の事実をたしかめて「一刻も早く御道すじのきけんをのぞかなければならない。」と決心しました。
（中略）
虎は谷をこえて向うの小山をのぼりはじめたので、三宅巡査はこゝぞと一発うちました。たちまち虎は前足を折って、頭を地にすりつけて倒れました。命中したのです。かけつけて見ると、たまはくびもとから口の中にぬけて、右の牙を折っていました。
夕方駐在所に引上げました。あつまった人々が口々に三宅巡査の手柄をほめますと、巡査は「私はどこをどうねらって、いつ引金を引いたか、全くおぼえがありません。たゞ宮殿下がお出でになるという今日、これを射そんじては申訳がないとばかり思っていました。」と話しました。
此の虎の皮は宮殿下へ記念として献上したということです。

実際に一九二一年に大徳山で虎に襲われた男性は、遠藤が取材した八〇年代の時点でまだ健在であり、「三宅巡査が射ったのではないですな…村の者が射ったのに」という関係者の証言[38]もあるのだが、「韓国最後の虎は日本へいった」という記憶だけはまちがいないものとして共有され受け継がれた。またこの『普通学校国語読本巻六』には、落とし穴から救いだしてくれた旅人を食べようとした虎がやり込められる「第二十六　恩知らずの虎」があるほか、『普通学校国語読本巻一』[39]にも、虎が干し柿を恐れて山に逃げ帰る話が掲載されており、「虎」にアイデンティティを寄せる人々の心は、植民地教科書の語りによって傷つけられ続けていた[40]ということになる。

遠藤は、誰が「朝鮮」の虎を狩ったのかを明らかにする調査の一環として朝鮮総督府が発表した「民有銃器数（猟銃）の推移[41]」を挙げ、一九一〇年から一九二六年にかけての所有者は圧倒的に「内地人」が多く、「朝鮮人」所有者はその約十分の一に過ぎないことを示している。このことは、三一独立運動が、五四運動よりもさらに平和的な運動であったことを連想させる。一九一九年の「朝鮮」では、武力闘争を行うことが困難なほどに武器が乏しかったわけである。むしろ三一独立運動宣言からは、この運動の担い手たちが、「武力をもって人を押さえつける時代」の終焉を宣言し、「朝鮮半島の独立のみならず」「日本の誤った道をただし、中国や日本をふくめた東アジアの共存[42]」をめざす方向へシフトしていったことがうかがえる。また、こうした宣言とデモ行進だけによる行動を陳独秀ら中国の文化人も高く評価したことも、北京大学発行の『毎週評論[43]』などから見てとれる。先に、施小煒の論を参照しながら五四運動の非暴力性に言及したが、それはそもそも三一独立運動に由来する精神だったと考えることもできるだろう。

しかし、いくら非暴力的であっても、「帝国」とは異なる価値、言説が示されたとき、体制（＝「帝国」）がどれほどの流血を伴う鎮圧を行ったかは、歴史の示すところである。いったんは「虎[44]」として過剰に恐れられた「山月記」の李徴が、語りの中で鎮圧さ

れてしまったことと同じである。

六

では、今日「山月記」は、高等学校でいったいどのように教育されているのだろうか。

諸氏の研究の成果のほか、新しい指導書などを概観すると、以前ほどには、「虎」への変身を自業自得、因果応報的に説明するものは少なくなったようだが、たとえば二〇二〇年度のＮＨＫ高校講座では、「山月記」について以下のような説明がなされている。

李徴が虎になったときに、自分がなぜ人間ではない姿になったのかについて、理不尽な運命としか考えておらず、自分の責任では全くないと信じていました。ところが、袁傪と会って話をしていくうちに自分の過去を振り返り、自分が他人にどのように接してきたかをかえりみるときに初めて、虎になる要素が自分の内面に潜んできたことに気がつきます。それは、尊大な羞恥心と臆病な自尊心という二つの矛盾する心でした。[45]

ここでは依然として、「虎になる要素が自分の内面に潜」むという発想が肯定されていることがわかる。なお同「理解度チェック」問題と正答も、李徴の「人間性の欠如」[46]が彼の運命を左右したことを示唆する内容となっている。「虎」への変身が「人間性の欠如」の結果であるという解釈は、増淵恒吉が一九五〇年代に行ったアクティブ・ラーニング的授業[47]以来、今日のＮＨＫ高校講座に至るまで、まだ根強く残っていることになる。

「現代文Ｂ」の最新の学習指導書においても、たとえば東京書籍版[48]は、「「非人間性」のみで変身の原因を説明するのは無理」としつつ、主題Ｂ（１００字）には「自分自身の内に潜む「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」という性情のために虎の姿となり」という一節がためらいなく記されている。また大修館書店版[49]は、「李徴が語る彼の性情から、虎になった原因を説明する」従来の教育を、「袁傪の役割や李徴の語りの信憑性の問題が等閑視」されたものとして批判しながら、一方で「観点別評価基準例」に「李徴が虎になった理由を、李徴の独白から読み取っている」ことを挙げ、「字数制限要約例」にも「人間性の問題」という語を入れている。筑摩書房版[50]の「虎になった原因より、虎になったことで、李徴は何をどう考えたのか」が重要だとの指摘には共感できるが、やはり「主題」には「暴走する自我自意識」という言葉がある。さらに数研出版版[51]では、まとめにあたり、「主人公が内面を分析してみせたように、生徒各自に、ある日の自分の行動や、日頃のものの考え方などについて、そのもとになっている自己の内面のあり方を分析させたい」ともある。

これらは、「国語」の「道徳」化を危惧する指摘[52]や、遠藤公男の書に登場する韓国人研究者が、教材「虎狩」を「修身」のものだと記憶していたことを想起させるものでもある。またこれは、「国語」の場で「山月記」を扱う際、その語りの構造を相対化する方法ではなく、袁傪を肯定し、袁傪に懲罰を受ける立場に生徒を置く方法が採られてきたことを意味するだろう。一九五一年で

初めて検定教科書に採用されてから七〇年、「山月記」が体制に従う人間を育てる道具にされてきたかと思うと、いたたまれない。

とくに数研出版版には、李徴に倣って生徒に内面の省察を促す記述があったが、ここからふと、戦前以来の「日記」教育を思い起こした。日本近代において、「文学」が「内面」を読む／書くものとして一応の定着を見てまもなく、一九一〇年代以降の学校では、日記添削という手段で少年少女たちの「内面」を教師ら[53]がチェックするシステムが整えられていったのである。

たとえば五十嵐力は、その大量の学生向けの日記文範の中で、数々の日記添削例を示しながら「赤裸々にした著者の生活を読者の生活に接合させる[54]」ことの重要性を説いている。また、日記を教師に見せることに関しては、後年活字化された『大宅壮一日記』にも、茨城中学在学中の一九一七年五月二六日分として以下のような興味深い記述がある。

土曜日　晴　どこかの中学へ送られるのだそうで、僕の二年生の時の日誌を出すよういわれた。（中略）併し、今自己研究が僕の主眼である上は、自己を公開することを怖れていてはならぬ。日誌もありのままに書いて始めて日誌の生命が生じる[55]。

「ありのまま」に日記を書くこと、そしてそれを権威あるものにさらすことが、葛藤を経て身体化していく様子が、『大宅壮一日記』には垣間見える。この一年後の大宅の日記には「国家主義」について煩悶する記述が見られ始め、いくばくもなく彼は退学処分を受ける。「内面」を語らせておいてそこに懲罰を与えるというパターンも、「山月記」の語り方、読まれ方と共通しているのだ。

「帝国」の近代を振り返ると、中国にも「朝鮮」にも日本にも、傷ついた無数の李徴が死屍累々の姿を呈しているかのようだ。そして今も、自己処罰を是とする言説が社会を席巻する中で、ほかの解を見出せずに生きねばならぬ地点に人々は追い込まれており、「山月記」はその格好のサンプルと化してしまっている。「虎」を責め、自分を責めずには読めない小説「山月記」――「山月記」をこのような暴力から解き放つためには、テクストの語りの中に、体制（＝「帝国」）にとって不穏なものを「虎」として暴きたて、否定しながら、徹底的にそれを無力化する構造が備わっていることをまず明らかにすべきではあるまいか。本論がその一助となれば幸いに思う。

注（1）礪波護「〈論説〉唐代の県尉」（『史林』一九七四・九）

（2）長谷川達哉「『山月記』を読む―8世紀中葉の中国を舞台にした物語として―」（『教育・研究』二〇一八）は、村上哲見『科挙の話』（講談社、二〇〇〇年）に「宰相に至るまでの典型的な出世コース」として「秘書省校書老→畿県（首都周辺の県）の尉→観察御史→拾遺→尚書省の員外郎→中書舎人→中書侍郎」が挙げられていることから、李徴にとって自分が「「畿県（首都周辺の尉）」ではなかった」ことが「受け入れがたいものであった」のだとしている。

（3）宮崎市定『科挙―中国の試験地獄―』（中央公論社、一九九〇（二版））に「旧中国において何がもうかるといって、官吏となるほど得な職業は外にない。しかもそれが名誉とあわせて実益をつかむのだからたまらない」とあるほか、岡本洋之介「唐代士大夫の科挙に対する意識―岑参の場合―」（『吉田富夫先生退休記念中国学論集』

汲古書院、二〇〇八）も、岑参の詩「時輩似君稀、青春戦勝帰／名登都詵第、身著老莱衣」を科挙に合格した友人が故郷に錦を飾るさまを吟じた祝いの詩として紹介している。

（4）唐代伝記のひとつ、李景亮撰「人虎伝」（『国訳漢文大成　文学部第一二巻　晋唐小説』国書刊行会、一九二〇）を原典と見なして参照する。

（5）科挙が「がんらい天子が貴族と戦うための武器」であり、「つてのない低い階級の者のために拓かれている」（宮崎市定『科挙―中国の試験地獄―』注（3）に同じ）のだとすれば、「人虎伝」の李徴はそもそも応試の必要などなかったとも考えられる。

（6）盛唐の王維は状元（進士一位合格）、中唐の白居易も進士科合格後に翰林学士などを歴任、唐代の詩人の多くは科挙に応じて合格、官職に就いている。

（7）「天宝の末年」の安史の乱のように天子に対して反乱を起こす者は唐代にもいたが、彼らは権力を志向している点で体制側と同じベクトルを持つ。

（8）施小煒「五・四運動と湖南人」（『社会文学』二〇二〇・八）

（9）注（8）に同じ。

（10）村上哲見「科挙の歴史」（『しにか』一九九九・九）は科挙（＝貢挙）を「人材を天子に献上する意」と説明している。

（11）熊遠報による口頭発表「〝掲竿而起〟的書生―五〇〇年中的〝五四〟―」（〈五四一百周年研討会〉二〇一九年五月一二日、東京大学駒場キャンパス）。〝掲竿而起〟は、「むしろ旗を掲げて立ち上がる、蜂起する」の意。

（12）「古譚」の名で「山月記」「文字禍」が掲載されたのは『文学界』一九四二年二月号だが、同一月号の河上徹太郎「光栄ある日」には、真珠湾攻撃を祝し「開戦に至るまでの、わが帝国の堂々たる態度」を誉める言葉があり、「山月記」が置かれた舞台が「帝国」と無縁でなかったことがよくわかる。

（13）村上哲見（注（10）に同じ）。

（14）高津孝「〈論説〉科挙制度と中国文化―文化的多様性の拘束―」（『東洋文化研究』二〇〇五・三）

（15）程千帆著、松岡栄志、町田隆吉訳『唐代の科挙と文学』（凱風社、一九八六）

（16）高津孝（注（14）に同じ）。

（17）高津孝（注（14）に同じ）。

（18）今日でも、荘魯迅『物語・唐の反骨詩人』（集英社、二〇〇二）のように、李白を隴西の出身と見なし、「李白の血に流れる反逆分子」が彼を宮廷から去らせたとする立場をとる論者も存在する。

（19）金文京『李白―漂泊の詩人　その夢と現実―』（岩波書店、二〇一二）

（20）乾源俊『生成する李白像』（研文出版、二〇二〇）は、天宝年間にしばしば行われた「制挙」について、「通常の選抜にこぼれた有能な人材を、皇帝じきじきの命により、ひろくくまなくひろい集める」ものと説明している。

（21）後年李白と併称される杜甫は、科挙進士科を受験し不合格となったために官職を求めつつ詩作を続けており、やはり李徴とは立場が異なる。また、中国には陶淵明のような隠遁思想をもつ詩人の系譜がないわけではないが、陶淵明は科挙制度が成立する前の六朝の詩人であるため、今回は検討の範囲としない。

（22）佐野幹『「山月記」はなぜ国民教材となったのか』（大修館書店、二〇一三）

（23）宮崎市定『科挙―中国の試験地獄―』（注（3）に同じ）には、「読書人が最も慎まねばならない悪徳は淫、女色」で「そういう悪業を過去に持つ挙子は、ふだんはいかに頭がよく働いても、いざという時に必ず失敗する」として、貢院（試験場）にお化けが出た物語を紹介している。このように読書人を戒めるコードの上に「人虎伝」が成立していた可能性はあるだろう。

（24）『高等学校現代文B　指導と研究』（第一学習社、二〇一四）の「山月記」「学習指導の要点」で、私は「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」

は「あくまで主人公自身の自己省察である上、たとえ彼が本当にそのような生き方をしてきたとしても、それが突然虎に変身しなければならない程の罪とは言えないはず」「この小説の世界から見出すべきものは、まず何よりも不条理な運命の原因を、自分自身に求めて言葉を紡いでいかざるを得ない「人間」のさま」であると書いたが、その見解は基本的に本論でも変わらない。

(25) 『指導書新現代文B　Ⅱ部　小説・詩歌』（東京書籍、二〇一八　執筆担当　川名大）

(26) 礪波護「唐の官制と官職」（小川環編『唐代の詩人―その傳記―』大修館書店、一九七五）

(27) 村上哲見（注(2)参照）のほか、小島浩之「〈論説〉唐代エリート官人の昇進経路の形成とその展開」（『東洋文化研究』二〇〇八・三）は「畿県尉、観察御史、左・右拾遺の三職を経験することで、品を飛び越えたスムーズな授官・遷転が可能」となることを示している。『唐記』の袁傪も、「観察御史」（正八品上）から「兵部侍郎」（従六品）に品を飛び越えた出世をしている。

(28) 小森陽一『〈ゆらぎ〉の日本文学』（日本放送出版社、一九九八）

(29) 佐野幹（注(22)に同じ）。

(30) この事情については、施小煒（注(8)）に詳しい。

(31) 鄭高咏「虎のイメージに関する一考察―中国のことばと文化―」（『言語と文化―愛知大学語学教育研究室紀要―』二〇〇五・一）

(32) 遠藤公男『韓国の虎はなぜ消えたか』（講談社、一九八六）

(33) 川村湊「中島敦と朝鮮」（『アジア遊学　五一』勉誠出版、二〇〇三）は、「虎狩」の初稿（『中央公論』一九三四年四月三〇日締切の「原稿募集」に応じたとき）では「日本人」「朝鮮人」となっていて、それがある段階において、すべて書き直されて、単行本『光と風と夢』（一九四二）掲載時までに「日本人」―「内地人」、「朝鮮人」―「半島人」となっていたと指摘している。川村は、「朝鮮総督府の「内鮮一体」政策の進行によって、外国人扱いとしての「朝鮮人」「日本人」という呼称ではなく、あくまで現在の居住地としての「内地」「半島」における区別（差別ではなく）のための呼称を作り出す必要と、その普及という時代的、社会的背景があることは明らかと述べている。しかしこの呼称の選択もまた、「虎」を飼いならす作業のひとつになったとは言えないだろうか。

(34) 在日韓人歴史資料館ＨＰ（２０２１年3月25日アクセス）http://www.j-koreans.org/exhibit/exhibit_23.html

(35) 注(32)に同じ。

(36) パク・フンジョン監督「隻眼の虎」（日本での公開は二〇一六年）は、一九二五年の「朝鮮」で、日本軍の害獣駆除に土地の猟師が駆り出され心ならずも「山の神」の大虎を追い詰めていく物語だが、そこでは大杉漣演じる日本の高官の、より大きな虎の皮を求めてやまない欲望が強調されている。

(37) 朝鮮総督府著作・発行（一九二三年）。

(38) 虎に襲われた男性（金有根）と一緒に遠藤の取材を受けた李相杰で、氏は、本当に虎を仕留めたのは叔父の李渭雨だと語っている。

(39) 朝鮮総督府著作・発行（一九二三年）。

(40) 中西伊之助「不逞鮮人」（一九二二）にも、「不逞鮮人の首魁」とされる主人が、「虎も剥製になつてはだめてす」と語る場面がある。

(41) 朝鮮総督府刊行『統計年報』（一九二六年）「朝鮮」における猟銃所有者数は、たとえば一九一八年で「内地人」一七、一六七人に対し、「朝鮮人」一、七三四人、「外国人」は三八五人で、計一九、二八六人の大半を「内地人」が占めていたことがわかる。

(42) 「現代語訳／3・1朝鮮独立運動１００周年キャンペーン「3・1独立運動」」（『週刊金曜日』二〇一九・二・二二）

(43) 『毎週評論』一三号（北京大学出版社、一九一九年三月一六日）には、陳独秀の執筆とされる「朝鮮独立的消息」の記事がある。そこでは、一次大戦の影響だけに帰することのできないこの運動の長所として「独立的予備非常周密、暴動非常文明」が挙げられ、そこからこの運動が「組織的」で「訓練的」であることがうかがい知れると述べられている。

(44) 「不逞鮮人」(注(40)に同じ)は、「不逞鮮人の巣窟」を「内地人」である男が訪ねる物語だが、主人は、三一独立運動の中で刺殺された娘の「血の色」が「短い筒袍の頸元から、ずつと袖にかけて、べつとり沁み滲ん」だものを見せたのちに、心のこもったもてなしをしてくれる。「不逞鮮人」という語がもたらす恐怖は、この小説の中では徐々に解消されていくのだが、小説発表の翌年一九二三年の関東大震災では、まさに「不逞鮮人」という語のもたらしたデマが、多くの「朝鮮人」虐殺を引き起こしたと言えよう。

(45) NHK高校講座現代文77～84回小説を読む「山月記」(全八回)⑦⑧
講師　鈴木一史「ラジオ学習メモ」(2021年3月27日アクセス)
https://www.nhk.or.jp/kokokoza/library/radio/r2_genbun/archive/chapter084.html　ただし、別の回を担当する長谷川達哉は必ずしも同じ見解を示していない。

(46) NHK高校講座現代文第84回小説を読む「山月記」(8)「理解度チェック」(問題作成協力：NHK学園高等学校)(2021年3月27日アクセス)https://www9.nhk.or.jp/kokokoza/radio/r2_genbun/check/rcheck084.html

(47) 増淵恒吉「ことばと文学の教育Ⅱ(高等学校)文学作品における形象の問題―「山月記」の取扱い方について―」(『日本文学』一九五六・一一)

(48) 注(25)に同じ。

(49) 『精選現代文B新訂版指導資料[1]第一部』(大修館書店、二〇一八　執筆担当　三宅義蔵)

(50) 『精選現代文B改訂版学習指導の研究第一部(一)』(筑摩書房、二〇一八　執筆担当　守本進)

(51) 『改訂版現代文B教授資料[2]第一章小説・詩・短歌と俳句』(数研出版、二〇一八　執筆担当　奥野政元)

(52) 小森陽一『大人のための国語教科書　あの名作の〝アブない〟読み方』(角川書店、二〇〇九)

(53) 『少年世界』(一九一二・一二)には「学生日記及通信用紙」の広告があり、カーボン紙によって複写される形の日記帳により「学生諸氏が毎日学事及び会計」を「郷里の父母へ報知」できると宣伝されている。

(54) 五十嵐力『作文三十三講』(早稲田大学出版、一九一三)

(55) 大宅壮一著『大宅壮一日記』(中央公論社、一九七一)

補　本論は科研費プロジェクト18k00297「一九一〇～三〇年代の文化メディアにおける日中相互表象の形成と展開」の一環です。また本論の執筆にあたり、「3研究グループ合同勉強会vol.2」(オンライン、二〇二一・一・三一)にて、ご参加の皆様から多くのご教示をいただきましたことに、感謝申し上げます。
なお、本論では、「支那」「鮮人」等の用語を当時のままに引用しました。何卒ご理解下さい。